



Title	ミリタリーチャプレン : 米軍における士官としての聖職者
Author(s)	石川, 明人
Citation	基督教学, 41, 21-23
Issue Date	2006-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46700
Type	article
File Information	41_21-23.pdf



[Instructions for use](#)

ミリタリーチャブレン

—米軍における

士官としての聖職者—

石川 明 人

現在のアメリカ軍は、原子力空母やステルス機、長距離ミサイルや精密誘導爆弾、また人工衛星や高度なレーダーシステムなどをもち、その軍費は世界の中でも突出している。だがそうしたアメリカ軍の中には、将兵の宗教上のケアをするための専属の聖職者も組み込まれている。彼ら「従軍チャブレン」はそれぞれの宗教や教派の聖職者であるが、同時に「大尉」や「少佐」といった階級をもつ士官なのである。

われわれが普段の生活の中で従軍チャブレンを目にする機会はほとんど無く、日本では彼らについてあまり知られていない。だが戦争映画などを注意深く見ている

と、従軍チャブレンのいるシーンも珍しくないことに気付く。例えば『プライベート・ライアン』（一九九八年）や『シン・レッド・ライン』（一九九八年）には、ほんの一、二秒のカットではあるが、銃弾や砲弾に倒れた瀕死の兵士のために最期の祈りを捧げるチャブレンの姿がはっきりと描かれている。同じく第二次大戦を描いた『史上最大の作戦』（一九六二年）では、空挺部隊と共にチャブレンもパラシュートをつけて戦地に降下して味方の兵士とやりとりをする場面がある。『M*A*S*H』（一九七〇年）は朝鮮戦争時の野戦病院で働く医師たちを主人公にしたコメディであるが、そこにも個人的なキャラクターをもった従軍チャブレンが登場する。またベトナム戦争が題材の『地獄の黙示録』（一九七九年）でも、戦闘の合間に野外で礼拝を執り行っているチャブレンと兵士たちのシーンが挿入されているのである。日本でもよく読まれ何度も映画化されたオルコットの『若草物語』では、主人公の姉妹たちの父親は、南北戦争に従軍チャブレンとして参加しているため家を留守にしているという設定になっている。映画や文学に登場する従

軍チャブレンを探すならば、他にももっと多くのものを見つけることが出来るだろう。

では今現在のアメリカ軍における従軍チャブレンの姿を見ることは難しいのかというところ、そういうわけでもない。われわれはアメリカ軍関連のウェブサイトで、過去や現在の従軍チャブレンの写真を多く集めることができる。最も多く見られるのは、基地や艦船の中で礼拝を行っているチャブレンと将兵の写真である。例えば筆者が収集した写真の中に、小さな礼拝堂で祭服を着た司祭が人々と共に礼拝を行っている一枚がある。一見したところ、それはどこかの街の教会での礼拝風景のように見える。しかし解説文を読むと、実はそれは原子力空母の中にあるチャペルで撮られたものであり、中央にいる司祭は海軍の大佐で、イースターの早朝礼拝を行っているところだという。そういわれてみれば、はじに写っている扉や壁など部屋のつくりは確かに船舶のものと思われる。礼拝に参加している者たちもみな軍の作業着姿である。また別の写真では、空母のカタパルトに機体を固定して今まさに発進しようとする戦闘機F14のパイロット

をすぐそばで見守るチャブレンの後ろ姿を撮ったものもある。他にも、ヘルメットと防弾ベストを着用したチャブレンが、無人となったサダム・フセイン宮殿跡の中庭で海兵隊員たちと礼拝をしている一枚もある。砂漠迷彩の戦闘服を着た隊員たちは、地面にすわって顔を下に向けており、横の壁には彼らの黒いM16ライフルが立てかけられている。

中でももっとも興味深い一枚は、空母ハリー・S・トルーマンの中で行われた洗礼式の写真である。水を満たした大きなケースに兵士が全身を入れ、脇でカーキ色の制服を着たチャブレンが儀式の言葉を述べている様子が写されている。場所は空母の中の航空機格納庫で、彼らの背後には戦闘攻撃機F/A18が見える。だが驚くのは、解説文に、洗礼のための水が入れられているその大きなケースは、普段はJDAMを保管・運搬する入れ物だと書かれていることである。JDAM(ジェイダム)というのはカーナビなどにも使われているGPS(全地球測位システム)を利用した、いわゆる精密誘導爆弾である。これは悪天候の日やかなりの高度からでも目標の位

置情報にしたがって落下地点を自らコントロールし、誤差一〇メートル以内という命中精度で目標を破壊すると言われている。そうしたハイテク兵器を入れるケースが、この日は洗礼のために使われているのである。これは何とも皮肉な情景であるように思われる。しかし、「この箱は普段は破壊のために用いられますが、今日は命の新生をあらわすために用いるのです」というチャプレンのコメントが紹介されているなど、むしろそのことをポジティブに捉えている様子さえうかがえる。この洗礼式は二〇〇三年の「イラクの自由作戦」中に行われたもので、空母の内部で行われた浸礼としてはアメリカ軍史上初めのものであるという。洗礼自体は各地の基地やキャンプでも頻繁になされており、戦死者の埋葬などと並んで従軍チャプレンの仕事の最も重要なものの一つである。

さて、「軍隊」とは基本的には戦争に関する専門組織であり、一方「聖職者」は、普通は愛と平和を唱える者たちであると理解されている。だとするならば、軍事組織の中にその一員として聖職者がいるという事態にはいささか奇異な印象を受けるかもしれない。しかし、少な

くともアメリカの場合、軍事と宗教の関係には植民地時代における民兵制度まで遡る歴史がある。従軍チャプレン制度は単に既成の軍事組織に対して後から宗教者を付加してつくり上げたものではなく、むしろ軍事と宗教はともに不可分のまま成長と発展を遂げてきたといっても過言ではないのである（米陸軍チャプレンセンター&スクールのHPに詳しい歴史が紹介されている）。また現在の従軍チャプレンたちの活動と基本理念に関しては、陸軍省から詳細なマニュアル（Field Manual 1-05）も刊行されており、それらを通して彼らの任務や位置づけを知ること出来る。

現在の世界情勢においても「宗教と平和」「宗教と戦争」という問題を考えることは大変重要であるが、そのためにはこうした軍のチャプレン制度というものについて分析することも、一つの切り口として有効であると思われる。